

の意味からも、本年八月に刊行された十日町博物館編「妻有の縮布織と女衆」（つまりのちぢみおりとおんなしよ）は、縮布織法の伝統的技術の記録保存を目ざしたものと注目される。後掲の上田将・佐藤康行両氏は伝統的漁法の調査に基づき、無形文化財として、漁法の実態を詳細に報告し、文化人類学の方法論に立って、民俗資料の保存についての問題の所在を示している。文化財の保存が一般に有形文化財の収蔵と保存に重さが置かれがちであるのに対し、無形文化財としての伝統漁法の調査報告として、上田・佐藤両氏の論稿は、貴重な問題提起に満ちたものである。

（新潟大学人文学部）

新潟県における鱈延縄漁とタコ漁について

上 田 将
佐 藤 康 行

我々の研究室では、過去数年間、新潟県漁村の社会学的・文化人類学的実態調査を行ってきた。この調査は、漁村の村落構造、人間関係、漁業技術、海の生態学、海の宗教と世界観など全体的に捉えることを目指したものであった。この調査の過程で、私どもは漁村の生活がいろいろな側面において大きな変化をきたしていることを改めて実感した。なかでも、急速な技術革新、漁業資

源の減少、生態学的変化、出稼ぎと過疎化などといった理由のため、網漁、延縄漁、釣漁など従来の伝統的な漁業は大きな変化を被り、すでに消滅したものや、たとえ存続していても消滅寸前のものがある。例えば、ここで取り上げる鱈延縄漁はもうほとんどなされなくなったし、磯見漁としてのタコ漁も地域によっては磯の消失などともになくなっていく。これら漁法が完全に消失しないうちに十分な調査・研究が必要であろう。ここでは上田が鱈延縄漁の記述を担当し、佐藤がタコ漁を担当した。

1. 鱈延縄漁について

鱈延縄漁は古くから新潟県の重要な漁業であった。通称タラバと呼ばれている鱈漁場は、海深約一三十尋（約）三三四メートルから二七十尋（約）四八六メートル）くらいのところで、新潟市以西の沖合に帯状に広く分布しており、また、両津湾沖合など佐渡にも見られる。この漁業は、越後では間瀬、寺泊、出雲崎などから能生・小泊に至る地域、佐渡では、両津市の湊から歌見に至る地域や相川町の姫津など多くの地域において行われてきた。この漁業の特徴は、寺泊、出雲崎などの例のように漁業権が株として特定の家に限定されていたり、あるいは、能生・小泊の場合のように特定の村落に限定されていたことである。従ってその地域の漁民がだれでも鱈延縄漁に従事できるわけではなかった。この権利には江戸時代から昭和二十四年漁業法の改正の年まで続いた。そ

の後、この延縄漁という漁法は次第に衰退し、網漁へと変化していった。今日、鱈延縄漁を行っている家は地域によっては一、二軒残っているが、ほとんどの地域ではすでになくなってしまっている。延縄漁で捕られた鱈は、底曳網による場合とは違って、一尾一尾丁寧にとるので姿形が傷まず値もよいといわれているが、この鱈延縄漁は餌掛け、縄操り、縄延えなどと大変手間がかかるし、漁業技術も難しく、次第に衰退していった。

鱈延縄漁というのは長い幹縄に一定の間隔で枝縄を付け、その先に釣り針を付けて鱈を釣る漁法で、餌にはイワシ、サンマ、イカなどの切り身が用いられる。これらの餌は魚脂に付けて用いられることが多い。漁具としては、幹縄、枝縄、建縄、縄電、沈子（石）、硝子玉、釣針などが使用される。クラ場につくと、船を一定の速度で走らせながら、その場で針に餌をかけて、延縄を次々に海中に投入する。この作業と同時に針と針の間に適当な感覚で硝子玉（浮き）と沈子（重りの石）を交互に付けながら海に落とす。鱈のいる深さのところに的確に延縄を落とさねばならず、この浮きと重りのバランスが大変重要である。魚群探知機などのない時代には、漁師はヤマアテと呼ばれる独自の測定法によって海の深さを知った。このヤマアテは海上から陸地の山など二個の対象物を重ねあわせ、それを二組作って船の位置を知る三角測定法の一つで、これは漁民の長い経験に基づいた知識と技術の体系であり、親から子へと伝えられてきた。この方法は現在でも使用さ

資料保存利用体制の確立をめざして（上田・佐藤）

れている。この他、鱈の習性、海面、海中、海底の複雑な潮の流れ、風の方向と強さなども考慮に入れなければ良い漁はできない。鱈延縄漁は動力船の普及する前は和船で操業した。以前は一、二歳で船にのり、櫂や櫓の使用の仕方、縄の延べ方などの訓練を受けた。船での役割は、例えば、能生町の場合は、センドウ、オヤジ、ムカエザ、チャラクラクなどに分かれており、センドウは船の一切の責任を持ち、オヤジは漁撈長の役で縄についての責任を持った。ムカエザは餌の係で、チャラクラクは何でもする便利屋であった。船でこのような役割、活動、生活については豊富な伝承がある。更に、善宝寺さん、金毘羅さん、エベスサン、ホトケサン（海での溺死体）などの信仰もこのような漁と深く結びついている。

2. タコ漁について

タコは好んでよく食されるが、どのようにして捕っているのかということとは、意外と知られていない。タコについての民俗的な報告は、早川孝太郎の『羽後飛鳥図誌』（一九二五年）がおそらく最初であろう。早川は本書において、タコを捕る道具や捕り方ばかりでなく、タコ穴にはそれぞれ名前があり、それは家にとつて一種の財産であって、娘に持参金としてもたせていることを紹介している。早川の本書は、このように漁具や技術の単なる紹介にとどまらず、社会的な側面をもとりあげた点で先駆的であった

といえる。

それでは、新潟県内のタコ漁はどのようなものがあるかという
と、タコ壺やタコ箱を用いて沖で捕る方法、岩場でスカシボウと
いう竹竿にカニなどを縛って穴から吸いついたところを捕る方
法、それから穴からヤスでタコを追い出し、カギやヤスで捕る方
法の三つに主として分けられる。タコ漁の道具には、沖漁ではタ
コ箱やホッキ貝、幹縄などが用いられ、磯漁ではスカシボウ、タ
コユスリ、イソダコヒキデ、タコカギ、マガリヤス、タコヤス、ヒ
ラヤス、タコタモなどが用いられる。

大河津分水が信濃川の氾濫を防ぐために大正十一年に完成され
て以降、越後の海岸線は著しく変化した。なかでも大河津分水の
周辺の町村では、岩礁がなくなり砂浜が新たに生まれている。こ
のため、これらの地域では、磯漁が急速に衰退し、磯でのタコ漁
も見られなくなっている。それに対して粟島や佐渡といった岩礁
にめぐまれたところは、磯でのタコ漁がいまだにみられる。

まず、タコ箱を用いてミズダコを沖で捕る漁法について、巻町
五ヶ浜から、事例をとってみていこう。ミズタコ漁は冬至から始
まって三月末までおこない、二月半から男の節句頃までつづいて
コダコを捕っている。ミズダコの方言は五カ浜ではオオダコとい
う。沖合一キロから、三キロまでの間で水深一六尋（約二十八・
八メートル）から四十尋（約七十二メートル）の砂地で操業する。
水深には尋の単位が用いられ、魚を捕る上では水深が重要である。

タコ箱には黒松の木を用いる。赤松の木を使うと箱の寿命が短
い。また、早く海中に入れると虫に食われやすい。箱には海水が
流れるように小さな穴があげられており、タコが穴に入る習性を
利用した漁法である。タコ箱は幹縄でつながれていて、片方から
引き上げていくので、タコの延縄といってもいいだろう。縄は、
かつては藁を燃って作ったが、現在ではロープを用いている。タ
コ箱は、タコ壺が壊れやすいので次第に用いられるようになった
ものであるが、出雲崎などではホッキ貝の殻が用いられることも
ある。

五カ浜のタコ漁は、歴史が古く、かつては鱈の株を所有してい
る十三軒の納屋元がタコ漁もおこなっていた。鱈はオオブネ、タ
コはマルキブネでおこなった。株の開放以降は、漁場を山当てに
よって四つに分け四艘が順繰りに漁場を交替して漁をしている。
乗り組む人はほぼ固定しており、箱の数も上限が決められている。
漁の条件が同じになるように社会的なとり決めがおこなわれている。
こうした申し合わせは、村によって相違している。隣の角田
浜では、タコ漁のさいのマルキブネを二艘くくって操業しており、
操業方法が五カ浜と異なっていた。

スカシボウという竹竿で磯ダコを捕る漁法を、粟島の事例から
見てみよう。この漁は、磯で手近なものを用いてできる便利さが
ある。磯の石の下にいる磯ガニをつかまえて、竹竿の先に糸で結
える。生きているカニを結えるのは難しいし、結え方も早くては

ずれない結え方をする。タコがいそうな岩穴のあたりで、カニが泳いでいるように竹竿を動かす。タコがカニに食いついてきたところで竿をひきあげる。カニの形を壊さないようにタコをはずしたり、タコが手に吸いつかないようにはずしたりするのは熟練を要する。タコの頭から自律神経を脱ぎ取り、岩の上に投げしておく。こうすると逃げられないという。この漁法は磯で手近なものでできるといふ利便性がある一方で、糸の結え方やタコの自律神経を脱ぎ取るなどの技術を要する。寺泊では、カニの上にサメやフグの皮を目立つようにつけたりするという。個人の工夫によってタコの収穫が大きく左右される面をもっている。粟島では、かつてタコ穴は家の財産として先祖から継承されていたが、現在ではおこなわれていない。佐渡も同様である。しかし、それでもよく捕れるタコ穴は人に教えない習慣は残っている。佐渡では、竿のことをスカシボウといわずにタコユスリといい、それを用いて誘き寄せ、カギでひっかけて捕る。竿の先には、シイラなどの皮をつける。そのほか、佐渡では現在タコ箱に代えてタコカゴを用いて捕っている。また、定置網にタコブネが入るが、タコブネは食べないという。

ところで、タコがタイの延縄の餌として用いられていることは、意外と知られていない。寺泊の指田清氏によれば、青菜などを煮るのに用いていない釜でミズタコの雌（雄ではだめ）を三回煮て、まだ湯気がでているタコを切って針につける。釜の匂いや煮かた

資料保存利用体制の確立をめざして（上田・佐藤）

などで、収穫が違うという。タコは捕る対象だけではなく、このように餌としても利用されている。寺泊では、ミズタコの方言はマタコという。漁具や漁法ばかりでなく、それをめぐる歴史的社会的な側面（組織や規則など）をも知っておく必要があるだろう。

以上概観してきたように、これらの漁業の変化は急速であり、そのため、漁具などの物質文化の収集を早急にする必要がある。また、漁法は多くの側面と結びついているので、漁具の収集のみでなく、社会関係の側面、漁業技術の体系、漁業と信仰との関係、海の世界観などに関して十分な聞き取り調査をしておかなければならない。また、ビデオなどで操業のプロセスなどを記録することも重要である。このため、これらの資料を収集、整理し、分析を行う機関として研究博物館がわが新潟県にも切望される次第である。

（新潟大学人文学部）